名城大学人文紀要　第131集（58巻２号）2022年12月
名城大学人文研究会　抜刷

# 表情と言語メッセージの一致、不一致が対人印象に及ぼす影響

和　田　　実

論　文

# 表情と言語メッセージの一致、不一致が対人印象に及ぼす影響

和　田　　実[1)]

The purpose of this study was to investigate the effects of the (in)consistency of facial expressions and verbal messages on the interpersonal impression. Facial expressions were manipulated as the smile face, the angry face, and the straight face. Verbal messages were manipulated as the positive content and the negative content. Combining facial expressions (3) and verbal messages (2), six kinds of video were made. Verbal messages, facial expressions, and the performer were selected by three preliminary studies. As a result, the performer was only a male. 45 (16 male and 29 female) undergraduates were asked to rate the interpersonal impressions on each video. The interpersonal impression scale by Hayashi, Ohashi, & Hirooka (1983) were used. Their scale consists of three impressions: intimacy, social desirability, and dynamism (activity/potency). Participants watched randomly all of 6 videos and rated the interpersonal impressions respectively. Major findings obtained were as follows: 1. Intimacy was varied by combining facial expressions and verbal messages. Although intimacy in the positive message was higher than in the negative message, intimacy in the positive message with the smile face was higher than with the angry face. Intimacy in the negative message with the angry face was lowest of all six. 2. Social desirability with the smile face was higher than with the angry face in spite of the messages. Further, social desirability in the positive message was higher than in the negative message in spite of the facial expressions. 3. Dynamism with the smile face and the straight face in the positive message was higher than in the negative message. Further, dynamism with the smile face and the straight face in the positive message was higher than with the angry face. Some sex differences were also found. These findings were discussed regarding a verbal-nonverbal consistency principle.

## 問題と目的

メッセージを伝えるチャンネルとして、大きくは言語内容によるコミュニケーション（言語コミュニケーション）と言語によらない行動、すなわち非言語的行動によるコミュニケーション（非言語的コミュニケーション）に分けることが可能である（どのような方法でコミュニケー

1）本研究は、伊藤奈緒美さん（平成28年度名城大学人間学部卒業）の卒業論文の一部のデータを再分析してまとめたものである。データを提供してくれた伊藤さんに感謝いたします。

ションをとるかによって、用いることのできるチャンネルは限定されるが)。Burgoon (1985) は、非言語的コードをアナログ的、言語コードをデジタル的としている。つまり、アナログ的である非言語的コードは、①自然に出てくる有用な②無限で③連続した範囲からなるのに対し、デジタル的である言語コードは、①分離し②任意に限定された単位の③有限のセットからなる、という。

また、Burgoon (1985) は非言語的シグナルシステムにユニークな特質として5つあげている。第一に、非言語的行動は図像的 (iconicity) である。第二に、いくつかの普遍的な形態と意味が存在する。つまり、どの文化、社会にも通用するものがある。第三に、同時に多くの様式(mode)でメッセージを伝達することが可能である。第四に、感覚刺激に対する直接的な受容力がある。すなわち、非言語的シグナルの多くは認知的媒介なしで、直接的で自動的な反応を引き起こす。第五に、言語メッセージよりも大きな自然発生性 (spontaneity) でもって符号化される。つまり、意図の曖昧さを多く含んで伝えられる。これらが心の奥にある感情を漏らすということにつながる。

そして、人には相互作用中に他者が真実を話しているかどうかを査定する強い傾向がみられる。青年や大人は真実か虚偽かを推論するのに言語行動－非言語的行動の一貫性原理を用いる(Friedman, 1979など)。すなわち、言語行動で示された感情 (affect) と非言語的行動で示された感情間の一貫性の関数として、人が知覚する真実さが変わるのである。両行動 (で示された内容) が一貫していれば、その人は誠実 (sincere) で嘘を言ってない (truthful) と推論されるのに対し、両行動 (で示された内容) が一貫していなければ、その人は不誠実で真実性に欠ける (untruthful) と推論されるのである。また、Rotenberg, Simourd, & Moore (1989) は、知覚者の虚偽の推論は、両行動の非一貫性の程度と正比例する増大ルール (incremental rule) に従うと言う。実際、真実を話す時より、嘘をつく時には言語行動と非言語的行動間により大きな非一貫性が示されることが見いだされている。しかも、非言語的行動によって本当の気持ちが“漏れ出す”と考えられている。

言語行動－非言語的行動の一貫性原理は、何歳から用いられ始めるのかを調べた研究もある。DePaulo, Jordan, Irvine, & Laser (1982) は、6、8、10、12年生、大学生を対象に欺瞞 (虚偽) を見つけ出す能力を調べている。結果によると、実験参加者は偽りの好意の表現を実際の好意の表現よりポジティブでなく、偽りの非好意の表現を実際の非好意の表現よりネガティブでないように知覚し、その割合が年齢とともに増えた。すなわち、年齢とともに欺瞞 (虚偽) を見つけ出す能力が増大することを見いだした。また、Rotenberg *et al.* (1989) は、対象者を幼稚園児 (平均5.6歳)、2年生 (平均7.4歳)、4年生 (9.3歳) として実験を行った。その結果、両行動の一貫性原理の使用は年齢が上がるにつれて増えることが見いだされた (ただし、幼稚園児の用い方はかなり限定された形であり、自分の性と刺激人物の性によって、真実さの評定が異なっていた)。以上のように、幼稚園児においても一貫性原理が多少とも用いられ、年齢と

ともに一貫性原理を用いる割合が高まり、12年生頃、すなわち青年期において大人とほぼ同レベルになることが分かってきている。

これまで検討してきたように、言語行動と非言語的行動に一貫性がみられない（矛盾している）時には、非言語的行動によって本当の気持ちが漏れ出すことが示されている（Rotenberg *et al.,* 1989）。つまり、言語行動よりも非言語的行動の方が真実の意味を伝えるとする研究が多くみられるのである。例えば、Mehrabian & Wiener（1967）は、相互作用交換における意味の93％は非言語的行動から生じ、わずか７％のみが言語行動によるという結果を報告している。非言語的情報と言語情報に関する研究概観を行なったBurgoon（1985）は、次のことを報告している。①一般的なパターンとして、大人は対人的意味を決定する際に言語行動よりも非言語的行動手がかりにより信頼をおいている。②子どもは非言語的行動手がかりより言語行動手がかりに重きをおいている。③大人の非言語的行動手がかりへの信頼は、言語行動と非言語的行動メッセージが矛盾する時に最も大きい。メッセージ内容がより一致するにつれ、言語行動手がかりは徐々に重要になる。④コミュニケーション機能がチャンネル信頼性を媒介する。すなわち、言語行動手がかりは、事実に関する、抽象的な、そして説得的なコミュニケーションで重要である。一方、非言語的行動手がかりは、関係的、帰属的、感情的、態度的メッセージでより重要である。⑤個々人がチャンネル信頼性に一貫したバイアスを持っている。すなわち、一貫して、非言語的行動を重視する者、言語行動を重視する者、および状況に適応的な者がいる。

対面的コミュニケーションをとる際には、言語行動と非言語的行動は同時に生じる。一般的に、対人関係において、それらは調和し、互いを強め合う。「怒ったこと」を言う時、我々はたいてい怒っているように見える。また、「愛しているよ」と言う時、我々はたいてい本気のように見える。このように、非言語的行動は言語メッセージを補足することができる（Argyle, 1972）。一方で、言語メッセージと非言語的行動は、補足的であるだけでなく、矛盾した形で一緒にもなる。例えば、眉をひそめながらすばらしいことを言う時、観察者はそういった非一貫性をどのように解釈するのであろうか。言語行動と非言語的行動が矛盾している場合、例えば、笑顔でネガティブな言葉を言う、あるいは怒った表情でポジティブな言葉を言うなどの場合、我々はそのような行動を取った人に対してどのような印象を持つのだろうか。

石川・越川（1993）は、大学生を対象に、矛盾したメッセージが表出される場面を用いて、①総合的評価を決定している伝達手段は、表情、音調、言語内容のいずれかという各チャンネルの相対的効果、および②チャンネル間の矛盾が送り手の意図と受け手の総合的評価にどのような差異を生むかを調べている。各チャンネルは肯定的か否定的かで操作している。その結果、各チャンネル間の矛盾したメッセージの総合的評価にあたっては、送り手が表情を否定的にした場合を除いて、表情の優位性が確認された。さらに、否定的表情が表出されると、表情以外の他のチャンネルの方がメッセージの受け手の総合的評価に影響を与え、受け手は表情に注目し総合的評価が過度に否定的になるのを避けようとする傾向が認められた。また、受け手の性

による差異はみられなかった。

野口・吉川（2010）は、演技者にポジティブ情動もしくはネガティブ情動を引き起こす映像を見せ、感じた感情と一致する（感じたままの）表情（「情動の自然表出」）もしくは逆の表情（「情動の不一致表出」）を表出させたのをビデオに撮り、そのビデオを実験参加者に見てもらい、表出者（演技者）の印象をたずねるという実験を行っている。結果によると、表出者に対する印象に性差がみられた。すなわち、男性ではネガティブ情動経験時にポジティブ情動を表出すると好ましさが低下し、ポジティブ情動経験時にネガティブ情動を表出した場合、男性では好ましく信じやすいと判断され、女性では魅力が低下する傾向がみられた。

また、井上（2014）は、表情が初対面の相手に与える印象についての研究を行っている。その結果、笑い顔や微笑みなどの笑顔に対しては「明るく、親しみやすく、親切」という印象を受ける人が多く、笑顔が初対面の相手に好印象を与えることを明らかにしている。さらに、真顔からは、「落ち着いて、意思が強く、自信がある」という印象を受ける人が多く、しかめ顔からは、「暗く、親しみづらく、不親切」という悪い印象を受ける人が多いということを明らかにしている。

そこで、本研究では表情とメッセージ（言語内容）を取り上げ、それらが一貫しているか矛盾しているかによって、その人物（表出者）に対する印象（対人印象）が異なるのかどうかを調べる。あわせて対人印象の性差についても調べる。

## 方　法

### 実験参加者

大学生45名（男性16名、女性29名）を対象とした。

### 刺激材料（映像）

劇団に所属している男性３名、女性４名を演技者として、２つのメッセージ（ポジティブ、ネガティブ）を３つの表情（笑顔、真顔、怒り顔）で話してもらい、ビデオに撮影した。声のトーンが印象に影響しないように、演じる際にはトーンを一定にするようにしてもらった。２つのメッセージは、ポジティブ文７つ、ネガティブ文７つから、予備研究１をもとに、ポジティブメッセージは「手伝ってくれて、本当にありがとう。」、ネガティブメッセージは「あなたって役に立たないね。」とした。さらに、予備研究２、３の結果に基づき、本実験では１人の男性演技者の映像（表情とメッセージ）のみを刺激材料として使用することとした（選定の過程は、付記の予備研究１～３を参照）。

### 手続き

20～30名の少人数授業（２つ）の時間に、教室備え付けの映像装置を用いて、スクリーン上にビデオ映像を提示した。映像は、表情（３）×メッセージ（２）の６通りで、提示順序はラ

ンダムであった。一つの映像を見終えるごとに、映像の人物に対する印象（対人印象）をたずねた。質問用紙は、冊子の形で配られ、最初のページは研究の説明等と個人的背景要因をたずねる項目があり、2枚目から対人印象をたずねる項目となっていた。一つの映像を見るたびに、一枚めくり、次のページに行くように指示した（用紙にも指示があるまで、ページをめくらないように記してあった）。

なお、実施にあたっては、実験への参加は強制でないことを伝え、納得した者だけが参加している。したがって、倫理的な問題はない。

**質問紙の構成**

質問紙は、個人的背景要因と対人印象をたずねるものから構成されていた。

**個人的背景要因**　性別、学年、年齢をたずねた。

**対人印象**　林・大橋・廣岡（1983）によるパーソナリティ認知尺度を用いた。この尺度は、「個人的親しみやすさ」、「社会的望ましさ」、「力本性」の3つの因子からなる。「個人的親しみやすさ」とは、他者に対する感覚的快－不快、あるいは情緒的評価に関した好感・親和の次元をさし、「社会的望ましさ」とは、道徳的善悪、あるいは知的側面の評価に関した尊敬・信頼の次元をさし、「力本性」は、意志の強さ（potency）と活動性（activity）とが融合した次元である（林他，1983）。

それぞれの次元のうち、因子負荷量が高い上位4項目ずつ、計12項目を選出した。なお、12項目の並びは、ページがかわるごとに異なっていた。用いた項目は以下の通りである。個人的親しみやすさは、「親しみにくい－親しみやすい、近づきがたい－人なつっこい、かわいらしい－にくらしい、感じのよい－感じの悪い」であり、社会的望ましさは、「責任感のある－責任感のない、慎重な－軽率な、軽薄な－重厚な、無分別な－分別のある」であり、力本性は、「意欲的な－無気力な、自信のある－自信のない、消極的な－積極的な、卑屈な－堂々とした」であった。これらの項目に、SD法形式の7件法で回答を求めた。

## 結　果

**尺度の構成**

**対人印象**　林他（1983）に従い、個人的親しみやすさ、社会的望ましさ、力本性の3次元として尺度化した。映像ごとに、各尺度の$\alpha$係数を算出したところ（表1）、満足のいく値であった。そこで、得点が高いほど個人的親しみやすさ、社会的望ましさ、力本性が高くなるように得点化し、項目の単純和を項目数で除したものを尺度得点とした。

**性、表情、メッセージが対人印象に及ぼす影響**

性、表情、メッセージ別の対人印象（個人的親しみやすさ、社会的望ましさ、力本性）の平均値（*SD*）を表2に示した。そして、3つの対人印象次元別に性（2）×表情（3）×メッセー

**表１　表情×メッセージの対人印象尺度のα係数**

| | 親 | 社 | 力 |
|---|---|---|---|
| 笑顔 | | | |
| ポジティブ | .86 | .84 | .72 |
| ネガティブ | .77 | .77 | .67 |
| 真顔 | | | |
| ポジティブ | .91 | .85 | .84 |
| ネガティブ | .83 | .78 | .67 |
| 怒り顔 | | | |
| ポジティブ | .92 | .87 | .85 |
| ネガティブ | .63 | .64 | .76 |

注）親：個人的親しみやすさ、社：社会的望ましさ、力：力本性

**表２　表情×メッセージの対人印象の平均値（*SD*）**

| | 個人的親しみやすさ | | 社会的望ましさ | | 力本性 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 |
| 笑顔 | | | | | | |
| ポジティブ | 4.13(0.44) | 4.35(0.63) | 3.00(0.84) | 3.41(0.77) | 3.61(0.58) | 3.95(0.59) |
| ネガティブ | 2.02(0.74) | 1.78(0.69) | 2.44(0.70) | 2.16(0.70) | 2.94(0.65) | 3.29(0.68) |
| 真顔 | | | | | | |
| ポジティブ | 3.34(0.52) | 3.47(1.13) | 3.45(0.56) | 3.39(0.85) | 3.59(0.58) | 3.41(0.82) |
| ネガティブ | 2.13(0.60) | 1.82(0.56) | 3.06(0.84) | 2.59(0.73) | 3.09(0.68) | 2.72(0.77) |
| 怒り顔 | | | | | | |
| ポジティブ | 2.58(0.70) | 2.33(0.98) | 3.52(0.63) | 3.20(0.99) | 3.36(0.76) | 2.91(0.90) |
| ネガティブ | 1.67(0.47) | 1.44(0.40) | 2.63(0.74) | 2.22(0.58) | 3.00(0.88) | 2.98(0.85) |

ジ（２）の分散分析を行った。性は参加者間要因、表情とメッセージは参加者内要因であった。

**個人的親しみやすさ**　表情（$F(2, 86)=59.90$, $p<.001$）とメッセージ（$F(1, 86)=207.95$, $p<.001$）の主効果、および表情×メッセージの交互作用（$F(2, 86)=42.24$, $p<.001$）が有意であった。そこで、交互作用について多重比較（*Bonfoerroni* 法。以下も同様）を行った（図１）。ポジティブメッセージでは、真顔と怒り顔より笑顔（ともに$p<.001$）、怒り顔より真顔（$p<.001$）、ネガティブメッセージでは、怒り顔より笑顔（$p<.05$）と真顔（$p<.001$）の方が高かった。また、笑顔、真顔、怒り顔ともに、ネガティブメッセージよりもポジティブメッセージの方が高かった（いずれの表情も$p<.001$）。

**社会的望ましさ**　表情（$F(2, 86)=6.00$, $p<.01$）とメッセージ（$F(1, 86)=51.33$, $p<.001$）の主効果が有意であった。表情の主効果について多重比較を行ったところ、笑顔と怒り顔より真

顔（ともに $p<.05$）の方が高かった（$M$；笑顔：2.75、真顔：3.12、怒り顔：2.89）。メッセージの主効果は、ネガティブメッセージ（$M$=2.52）よりもポジティブメッセージ（$M$=3.33）の方が高いことを示している。

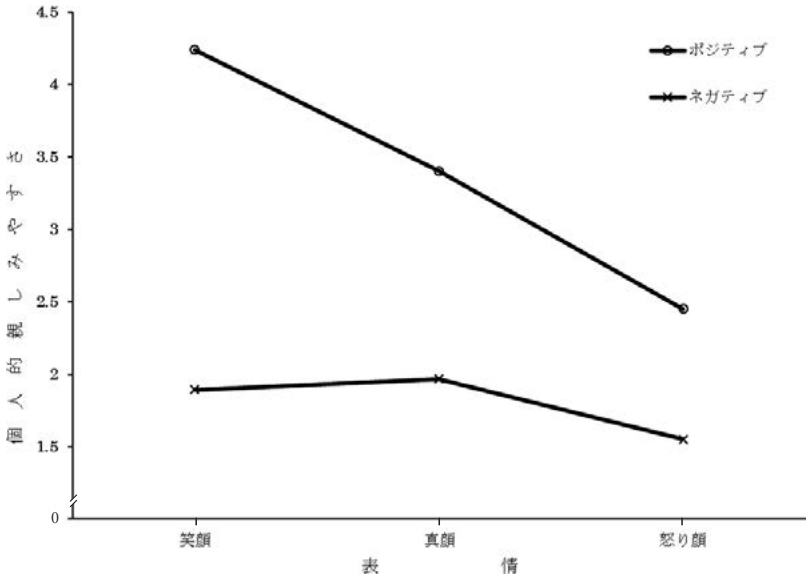



**図1　表情×メッセージによる個人的親しみやすさ**

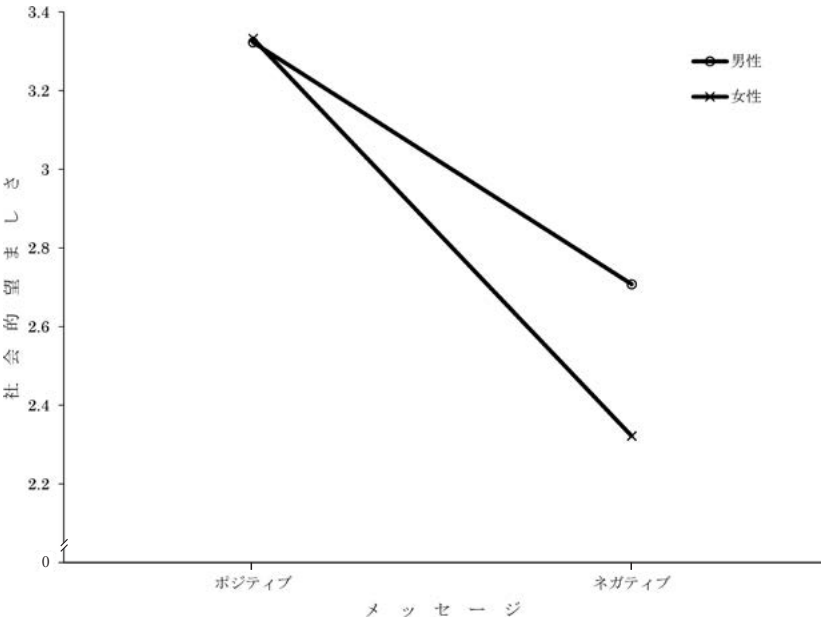



**図2　性×メッセージによる社会的望ましさ**

さらに、性×メッセージの交互作用（$F(1, 86)=3.06$, $p<.10$）が有意な傾向にあった。有意な傾向ではあったが、多重比較を行った（図２）。ポジティブメッセージには性差はなかったが、ネガティブメッセージでは、女性より男性の方が高かった（$p<.01$）。また、男女ともに、ネガティブメッセージよりもポジティブメッセージの方が高かった（男性：$p<.01$、女性：$p<.001$）。

**力本性**　表情（$F(2, 86)=8.88$, $p<.001$）とメッセージ（$F(1, 86)=13.98$, $p<.001$）の主効果、および表情×メッセージ（$F(2, 86)=4.74$, $p<.05$）と性×表情（$F(1, 86)=7.15$, $p<.001$）の交互作用が有意であった。そこで、交互作用について多重比較を行った。まず、表情×メッセージの多重比較についてである（図３）。笑顔と真顔では、ネガティブメッセージよりもポジティブメッセージの方が高かった（ともに $p<.001$）。また、ポジティブメッセージでは、怒り顔より笑顔と真顔の方が高かった（ともに $p<.001$）。

次に、性×表情の多重比較についてである（図４）。笑顔は男性より女性（$p<.05$）の方が高く、真顔では女性より男性（$p<.10$）の方が高い傾向にあった。また、女性は真顔と怒り顔（ともに $p<.001$）より笑顔の方が高かった。

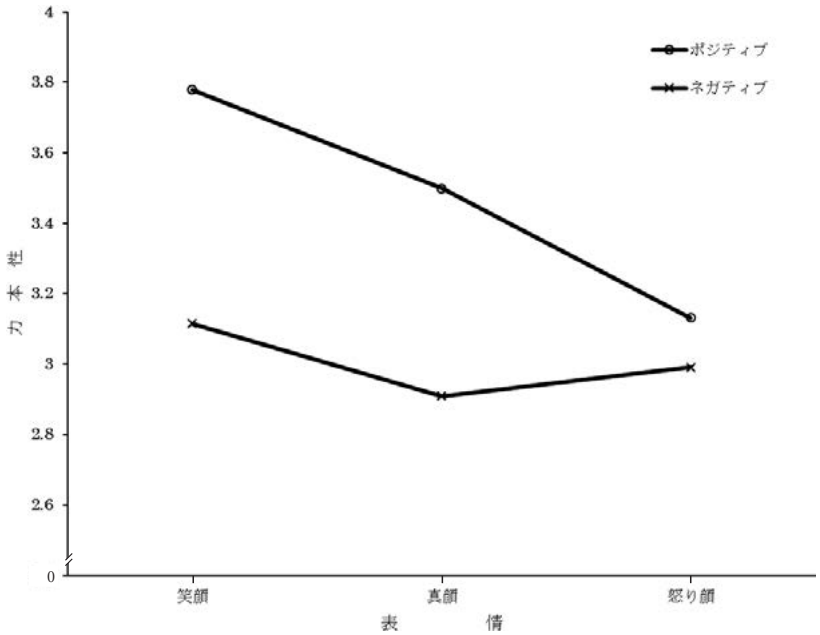



**図３　表情×メッセージによる力本性**

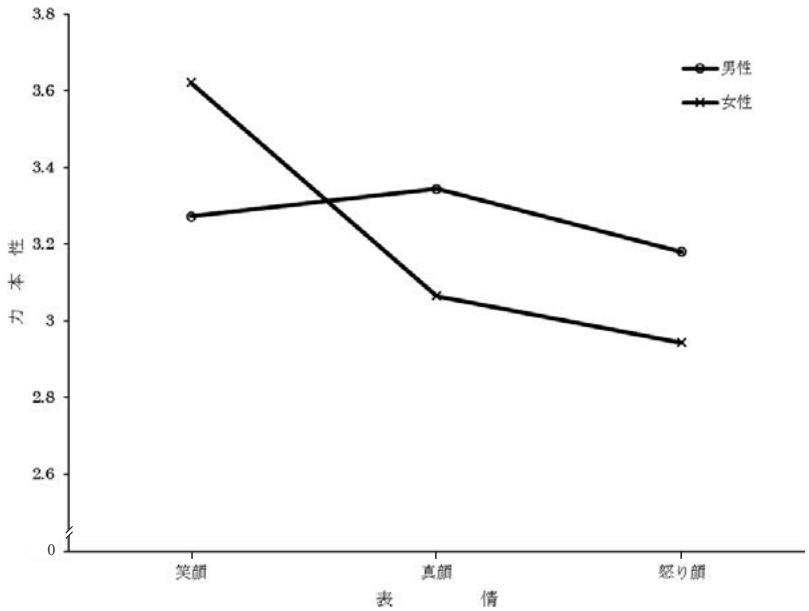



**図 4　性×表情による力本性**

## 考　察

本研究の目的は、表情とメッセージ内容が一貫しているか矛盾しているかによって、その人物に対する印象（対人印象）が異なるのかどうかを調べることであった。表情は笑顔、真顔、怒り顔の 3 つであり、メッセージ内容はポジティブかネガティブかとして操作した。笑顔でポジティブ内容を伝える場合と怒り顔でネガティブ内容を伝える場合が、表情とメッセージ内容が一貫していると言うことになる。一方、笑顔でネガティブ内容を伝える場合と怒り顔でポジティブ内容を伝える場合が、表情とメッセージ内容が一貫していないと言うことになる。

**個人的親しみやすさ**　表情とメッセージの組み合わせによって、個人的親しみやすさが異なった。ポジティブメッセージでは、真顔と怒り顔より笑顔、怒り顔より真顔、ネガティブメッセージでは、怒り顔より笑顔と真顔の方が高かった。また、笑顔、真顔、怒り顔ともに、ネガティブメッセージよりもポジティブメッセージの方が高かった。

これらをまとめると、以下のようになる。表情にかかわらず、ネガティブメッセージよりもポジティブメッセージの方が個人的親しみやすさが高かったが、怒り顔でポジティブメッセージよりも、笑顔でポジティブメッセージの方が個人的親しみやすさが高かった。また、怒り顔でネガティブメッセージの場合が、最も個人的親しみやすさが低かった。なお、真顔は笑顔と怒り顔の間の評価であった。

言語行動、非言語行動によって示された感情の一致・不一致についての研究であるが、Friedman（1979）は同様の結果を報告している。すなわち、両行動（で示された内容）が一貫

していれば、その人は誠実と推論されるのに対し、両行動（で示された内容）が一貫していなければ、その人は不誠実と推論される、ということを明らかにしている。本研究でも、笑顔でポジティブメッセージの場合が最も個人的親しみやすさが高くなっており、言語行動－非言語的行動の一貫性原理（Friedman, 1979）が成り立っていると言えよう。ただし、怒り顔でネガティブメッセージよりも、笑顔もしくは真顔でネガティブメッセージを述べた方が、まだ個人的親しみやすさは高かった。Rotenberg *et al.*（1989）は、言語行動－非言語的行動の一貫性がなければないほど、虚偽と判断されるということを明らかにしているが、対人印象に関しては、ネガティブメッセージを述べる場合、言語行動と非言語的行動が一貫していなくても、まだ笑顔の方が個人的親しみやすさを感じると言うことであろう。林他（1983）による個人的親しみやすさとは、他者に対する感覚的快－不快、あるいは情緒的評価に関した好感・親和の次元をいう。よって、笑顔の効果が大きかったのであろう。また、井上（2014）は、表情が初対面の人に与える印象について調べ、笑顔の場合、「明るく、親しみやすく、親切」な印象を受け、しかめ顔の場合、「暗く、親しみづらく、不親切」な印象を受けることを明らかにしている。よって、ネガティブメッセージであっても、怒り顔よりも笑顔の方が個人的親しみやすさが高かったのであろう。

**社会的望ましさ**　社会的望ましさは、笑顔と怒り顔より真顔の方が高く、ネガティブメッセージよりもポジティブメッセージの方が高かった。すなわち、表情とメッセージ内容が一貫している笑顔でポジティブメッセージが最も社会的望ましさが高いとは言えなかった。表情に関しては、メッセージ内容にかかわらず、笑顔より真顔の方が社会的望ましさが高かった。交互作用は有意ではなかったが、例えば、笑顔の場合、笑顔でポジティブメッセージを述べる場合と、ネガティブメッセージを述べる場合を合わせた平均値となっているので、笑顔でネガティブメッセージを述べるという不自然さが社会的に望ましいとは思われなかったからかも知れない。

また、メッセージ内容によって社会的望ましさの性差がみられた。ポジティブメッセージに性差はみられなかったが、ネガティブメッセージでは、女性より男性の方が高かった。すなわち、女性よりも男性の方がネガティブメッセージを述べる人に対する社会的望ましさが高かったのである。そもそも性差があり、ネガティブな内容でも明確に発言する男性（演技者）を男性は社会的に望ましい、と判断したのかも知れない。しかし、本研究の演技者は男性のみであったので、ネガティブな内容を同性から言われるか、異性から言われるかによる相違が表れた可能性もある。女性の演技者も加えて検討する必要があろう。

**力本性**　力本性は、笑顔と真顔では、ネガティブメッセージよりもポジティブメッセージの方が高かった。また、ポジティブメッセージでは、怒り顔より笑顔と真顔の方が高かった。すなわち、笑顔でポジティブメッセージが最も力本性が高かった。怒り顔のネガティブメッセージが最も低いとは言えなかったが、個人的親しみやすさと同様に、言語行動と非言語行動の一貫性（Friedman, 1979）が重要ということであろう。

また、ネガティブメッセージでは表情による差異が見られなかった。本研究で用いたネガティブメッセージは「あなたって役に立たないね。」と非常に強い言葉であり、本研究で用いた力本性（意志の強さと活動性とが融合した次元：林他, 1983）と合致し、表情の影響がなくなってしまったのかも知れない。他のネガティブメッセージを使って、検討する必要があろう。

また、表情による性差が見られた。力本性は、笑顔の場合、男性より女性の方が高く、真顔では女性より男性の方が高い傾向にあった。そして、女性は真顔と怒り顔より笑顔の方が高かった。野口・吉川（2010）は、演技者にポジティブ情動もしくはネガティブ情動を引き起こす映像を見せ、感じた感情と一致する（感じたままの）表情、もしくは逆の感情の表情を表出させ、それをビデオに撮り、ビデオを実験参加者に見てもらい、表出者（演技者）の印象をたずねるという実験を行っている。結果によると、表出者に対する印象に性差がみられ、男性ではネガティブ情動経験時にポジティブ情動を表出すると好ましさが低下し、ポジティブ情動経験時にネガティブ情動を表出した場合、男性では好ましく信じやすいと判断され、女性では魅力が低下する傾向がみられた。野口・吉川（2010）の研究のように、本研究結果も一致、不一致が与える印象に性差があると言えるかも知れない。ただし、本研究の演技者は男性のみであったので、ネガティブな内容を同性から言われるか、異性から言われるかによる相違が表れたのかも知れない。女性の演技者も加えて検討する必要があろう。

最後に、本研究の問題点および課題をあげておく。第一に、予備研究の結果、メッセージを送る人（演技者）が男性のみとなってしまったことである。男性が男性に対して抱く印象、女性が男性に対して抱く印象は同じと言えない可能性がある。本研究で性の要因が関連したのは、社会的望ましさと力本性のみであったが（ともに交互作用が有意で、前者は性×メッセージ、後者は性×表情）、今後は、女性の演技者についても同時に調べる必要があろう。ただし、予備研究により、本研究では演技者が男性のみの一人となったので、見た目（身体的魅力度）が及ぼす影響を考慮する必要はなかった。

第二に、ポジティブ、ネガティブメッセージともに、一文を述べただけであった。よって、各文が意味する個別の内容が影響した可能性があるかも知れない。各メッセージを複数の文章にして検討する必要があろう。

第三に、表情とメッセージ以外の要因が対人印象に影響を与えている可能性である。例えば、声のトーンである。本研究では、劇団に所属している人に、表情にかかわらず声のトーンは一定にするように依頼した。しかし、メッセージによって異なっていたかも知れない。したがって、今後は声のトーンに関しても検討する必要があるだろう。

最後に、映像時間の問題である。本研究でのメッセージは一文であったので、映像提示はほんの数秒であった。そのために、表情の読み取りよりも言語メッセージの影響が大きくなった可能性がある（予備研究で、言語なしで、同じ秒数を提示して、３つの表情が判別できること

を確認してはいるが)。野口・吉川（2010）は、言語メッセージはないが、表情だけを約１分間提示している。

## 引用文献


Argyle, M. (1972). Nonverbal communication in human social interaction. In R.A. Hinde (Ed.), *Nonverbal Communication* (pp.243-269). Cambridge University Press.

Burgoon, J.K. (1985). Nonverbal signals. In M.L. Knapp & G.R. Miller (Eds.), *Handbook of interpersonal communication* (pp. 344-390). Newbury Park, CA.: Sage.

DePaulo, B.M., Jordan, A., Irvine, A., & Laser, P.S. (1982). Age changes in the detection of deception. *Child Development*, *53*, 701-709.

Friedman, H.S. (1979). The interactive effects of facial expression of emotion and verbal messages on perceptions of affective meaning. *Journal of Experimental Social Psychology, 15*, 453-469.

林文俊・大橋正夫・廣岡秀一（1983）．暗黙裡の性格観に関する研究（Ⅰ）―個別尺度法によるパーソナリティ認知次元の抽出―　実験社会心理学研究，*23*，9-25.

井上清子（2014）．表情が初対面の相手に与える印象　生活科学研究，*36*，183-194.

石川利江・越川房子（1993）．矛盾したメッセージの認知―各チャンネルの相対的効果と性差の検討―　教育心理学研究，*41*，93-98.

Mehrabian, A. & Wiener, M. (1967). Decoding of inconsistent communications. *Journal of Personality and Social Psychology*, *6*, 109-114.

野口素子・吉川左紀子 (2010). 表情表出による情動調整が受け手の情動と対人印象判断に及ぼす影響―不一致表出に着目して―　対人社会心理学研究，*10*，147-154.

Rotenberg, K.J., Simourd, L., & Moore, D. (1989). Children's use of a verbal-nonverbal consistency principle to infer truth and lying. *Child Development, 60*, 309-322.


## 付　記（予備研究）

刺激材料の作成

次の３つの予備研究によって、本研究で用いる刺激材料（映像）を確定した。

### 予備研究 1

本研究で使用する「ポジティブメッセージ」と「ネガティブメッセージ」を１つずつ選定することを目的とした。

### 方法

大学生20名（男性10名、女性10名）を対象に調査した。石川・越川（1993）を参考に、ポジティブメッセージを７文（「本当に上手にできたね。」、「一緒にいると楽しそうだね。」、「いいお友達をもっているんだね。」、「手伝ってくれて、本当にありがとう。」、「ユーモアがあって面白い

ね。」、「頑張り屋さんだね。」、「あなたの笑顔はいいね。」)、ネガティブメッセージを７文(「あなたには関係ないでしょ。」、「もうあきらめた。あなたにはできないね。」、「一人でいる方が楽だよ。」、「人間としてどうなの。」、「あなたって役に立たないね。」、「本当に馬鹿だね。」、「私は興味ないから静かにして。」)を選定した。そして、相手(他者)からそれぞれのメッセージ(言葉)を言われた時に、どのように感じるかを「１．非常に嫌である～５．非常に嬉しい」の５件法で尋ねた。文章(文字)のみを提示して判断してもらった。

**結果**

ポジティブメッセージの平均値(*SD*)は、高い順に「手伝ってくれて、本当にありがとう。」(4.80(0.52))、「いいお友達をもっているんだね。」(4.45(0.76))、「あなたの笑顔はいいね。」(4.40(0.68))であった。ネガティブメッセージの平均値は、低い順に「あなたって役に立たないね。」(1.35(0.59))、「人間としてどうなの。」(1.50(0.69))、「もうあきらめた、あなたにはできないね。」(1.60(0.68))であった。

そこで、最もポジティブ度が高いメッセージと最もネガティブ度が高いメッセージの得点に差があるかを *t* 検定によって調べた。その結果、有意差が得られ($t(19)=18.69$, $p<.001$)、ネガティブメッセージよりもポジティブメッセージの方が他者から言われて「嬉しい」ことが明らかとなった。そこで、これらの２つのメッセージを使用することとした。

**予備研究2**

本研究で使用する映像を選定するのを目的とした。すなわち、男性、女性の演技者の中から、表情の区別がしやすい男女それぞれ１名を選定するのを目的とした。

**ビデオの作成**　演じてもらう表情は、先行研究にならい、笑顔、怒り顔、真顔とした。劇団に所属している男性３名、女性４名に、予備研究１で選定したポジティブメッセージとネガティブメッセージを笑顔、真顔、怒り顔の３つの表情とともに話してもらいビデオに撮影した。すなわち、１人が６通り演じた。声のトーンが印象評定に影響を与えないように一定にしてもらった。

**方法**

大学生11名(男性６名、女性５名)を対象に調べた。ビデオに撮影した男性３名と女性４名の演技者の映像を無音の状態ですべて見てもらった。そして、笑顔、真顔、怒り顔の区別が一番分かりやすいと思った演技者を男女１名ずつ選んでもらった。

**結果**

最も多くの人が３つの表情の区別をしやすいと判断した男性１名(11名中６名が選択)と女性１名(11人中５名が選択)を選んだ。

**予備研究 3**

予備研究 2 で選定した男女各 1 名の演技者が示す表情は笑顔、真顔、怒り顔の 3 つの区別が出来るのかを検討することを目的とした。

**方法**

大学生12名（男性 6 名、女性 6 名）を対象に調べた。男女各 1 名の演技者の映像を無音で提示し、その表情からそれぞれの感情がどれくらい表れていると思うかを Ekman & Friesen（1975 工藤力（訳編）1987）による 6 つの基本感情（怒り、幸福感、驚き、恐怖、悲しみ、嫌悪）を用いて調べた。回答は、それぞれの感情がどの程度表れていると思うかについて「1．とてもそう思う～5．まったくそう思わない」の 5 件法であった。演技者の男女ごとに、3 つの表情（笑顔、真顔、怒り顔）× 2 種類のメッセージ（ポジティブ、ネガティブ）の 6 種類をランダムに呈示した。

**結果**

以下の 3 つの分析を行った。

（1）演技者が笑顔、真顔、怒り顔の 3 つの表情でポジティブメッセージとネガティブメッセージを述べている時の感情認知に差があるのかを映像に対する 6 つの感情への回答それぞれについて、演技者が男性の場合と女性の場合ごとに、表情による一要因の分散分析を行って調べた。表情は参加者内要因である。以下では、最も関連すべき幸福感と怒りについてのみ記す。

①男性の演技者がポジティブメッセージを言っている場合

A．幸福感

表情に有意差（$F(2, 20)=16.36$, $p<.01$）が得られた。多重比較を行ったところ、「笑顔＞怒り顔、笑顔＞真顔」の関係があった。

B．怒り

表情に有意差（$F(2, 20)=18.50$, $p<.01$）が得られた。多重比較を行ったところ、「笑顔＜怒り顔、真顔＜怒り顔」の関係があった。

②男性の演技者がネガティブメッセージを言っている場合

A．幸福感

表情に有意差（$F(2, 20)=117.42$, $p<.001$）が得られた。多重比較を行ったところ、「笑顔＞真顔＞怒り顔」の関係があった。

B．怒り

表情に有意差（$F(2, 20)=46.19$, $p<.001$）が得られた。多重比較を行ったところ、「笑顔＜怒り顔、真顔＜怒り顔」の関係があった。

③女性の演技者がポジティブメッセージを言っている場合

A．幸福感

表情に有意差（$F(2, 20)=41.69$, $p<.001$）が得られた。多重比較を行ったところ、「笑顔＞怒

り顔、笑顔＞真顔」の関係があった。

B．怒り

表情に有意差（$F(2, 20)=38.58, p<.001$）が得られた。多重比較を行ったところ、「笑顔＜怒り顔、真顔＜怒り顔」の関係があった。

④女性の演技者がネガティブメッセージを言っている場合

A．幸福感

表情に有意差（$F(2, 20)=14.46, p<.01$）が得られた。多重比較を行ったところ、「笑顔＞怒り顔、笑顔＞真顔」の関係があった。

B．怒り

表情に有意差は得られなかった（$F(2, 20)=2.50, ns$）。すなわち、上手く区別できなかった。

以上の結果より、演技者が男性の場合はポジティブメッセージを述べている時もネガティブメッセージを述べている時も、怒り顔と笑顔は区別ができるということが明らかとなった。さらに、幸福感得点において怒り顔よりも笑顔の方が高く、怒り得点においては笑顔よりも怒り顔の方が高かった。演技者が女性の場合は、ポジティブメッセージを述べている時は怒り顔も笑顔も区別ができるという結果であったが、ネガティブメッセージを述べている時は怒り顔の判断が難しいということが明らかになった。

（2）ポジティブメッセージとネガティブメッセージを述べている時の笑顔同士、真顔同士、怒り顔同士の合計得点を算出し、3つの表情によって感情認知に差異があるかを男性、女性の演技者ごとに、表情による一要因分散分析を行って調べた。（1）と同じく、最も関連すべき幸福感と怒りについてのみ記す。

①男性演技者の場合

A．幸福感

表情に有意差（$F(2, 22)=68.38, p<.001$）が得られた。多重比較を行ったところ、「笑顔＞真顔＞怒り顔」の関係があった。

B．怒り

表情に有意差（$F(2, 22)=48.72, p<.001$）が得られた。多重比較を行ったところ、「笑顔＜怒り顔、真顔＜怒り顔」の関係があった。

②女性演技者の場合

A．幸福感

表情に有意差（$F(2, 22)=35.29, p<.001$）が得られた。多重比較を行ったところ、「笑顔＞真顔、笑顔＞怒り顔」の関係があった。

B．怒り

表情に有意差（$F(2, 22)=11.61, p<.001$）が得られた。多重比較を行ったところ「笑顔＜怒り顔、笑顔＜真顔」の関係があった。

以上の結果より、（１）の分析とほぼ変わらない結果であることが確認された。（１）の分析では、女性の演技者が怒り顔で述べている場合、表情の有意差が得られなかったが、メッセージのポジティブとネガティブの要因を無くした今回の一要因分散分析では有意差が見られた。しかし、多重比較を行ったところ、怒り顔と真顔がうまく判別はされていないことが明らかとなった。したがって、演技者が女性の場合の映像は刺激材料として使用するのは問題がある、と考えられた。

（３）笑顔、真顔、怒り顔の表情ごとに、ポジティブメッセージとネガティブメッセージを述べている時の感情認知に差があるのかを演技者の性ごとに調べた。例えば、「怒り顔」の場合、怒り顔でポジティブメッセージを述べている時とネガティブメッセージを述べている時の感情認知に差があるかどうかを対応のある $t$ 検定によって調べた。（１），（２）と同じく、最も関連すべき幸福感と怒りについてのみ記す。

①男性の演技者：

怒り顔：怒り（$t(11)=0.45, ns$）、幸福感（$t(11)=1.48, ns$）ともに有意差はなかった。

笑顔：怒り（$t(11)=0.67, ns$）、幸福感（$t(11)=0.67, ns$）ともに有意差はなかった。

真顔：怒り（$t(11)=1.48, ns$）、幸福感（$t\ (11)=1.11, ns$）ともに有意差はなかった。

②女性の演技者：

怒り顔：怒り（$t(11)=5.51, p<.01$）に有意差、幸福感（$t(11)=2.14, p<.10$）に有意な傾向がみられた。

笑顔：怒りに有意差はなかった（$t(11)=0.69, ns$）が、幸福感には有意差があった（$t(11)=2.57, p<.05$）。

真顔：怒りに有意差があった（$t(11)=2.35, p<.05$）が、幸福感には有意差がなかった（$t\ (11)=0.00, ns$）。

以上の結果より、演技者が男性の場合、３つの表情すべてにおいて有意差が得られなかったため、述べているメッセージ内容（ポジティブ、ネガティブ）にかかわらず、怒り顔からは怒り、笑顔からは幸福感を同じように認識されることが明らかとなった。一方、演技者が女性の場合は、いずれの表情においても有意差が得られ、同じ怒り顔であっても、述べているメッセージ内容によって受け取られる感情認知が異なることが明らかとなった。したがって、演技者が女性の場合の映像は刺激材料として使用するのは問題がある、と考えられた。

### 刺激材料の決定（予備研究に基づく結論）

これら３つの分析結果より、演技者が女性の場合は実験参加者によって表情からの感情認知にばらつきがあることが確認されたため、刺激材料として使用できない。そこで、本実験では演技者が男性の場合の映像のみを刺激材料として使用することにした。

### 引用文献

Ekman, P. & Friesen, W.V. (1975). *Unmasking the face: A guide to recognising emotions from facial clues.* Prentice-Hall.（工藤力（訳編）(1987)．表情分析入門－表情に隠された意味をさぐる　誠信書房）

石川利江・越川房子（1993)．矛盾したメッセージの認知―各チャンネルの相対的効果と性差の検討―　教育心理学研究 , *41*, 93-98.